

2006年5月13・14日(金・土) — 第2回 —

JA ささかみ 田んぼの生きもの調査



土から見つかる小さな命を見つめる子ども

調査日時：5月14日

参加人数：100名

参加団体：JA ささかみ、新潟大学、新潟総合生協、パルシステム

調査地点：沢口A(ふゆみずたんぼ)

沢口B(減・減栽培)

調査項目：イトミミズ、ユスリカ、ミジンコ、ドブシジミ、トビムシ調査

農法しだいで、生きものが蘇る

風薫る五月、ささかみは田植えの真っ盛りです。JA ささかみの職員で自らも有機栽培農家である石塚さんが「冬水たんぼ」を始めたのは2002年、初調査を行ったのは2005年4月のこと。

「調査をやってみて気づいたのは、生きものにとってよりよい環境をつくるのがいかに大切か、ということ。

農法と生きものはリンクしているという価値観を、生産者と消費者が共有する必要がありますね」と、石塚さんは言います。

田んぼを乾田化・大規模化して農薬や化学肥料に依存するのが、農業全体の主流。それに逆行して、生きものを増やし、生きもの同士のバランスの上でお米を育てるのが、ふゆみず田んぼです。

「環境の指標となる生きものは、空を飛ぶホタル、水の中にすむメダカ、土の中にすむイトミミズ。彼らがどんどん増えることがうれしい」

地域の有機栽培農家にも少しずつ、ふゆみず田んぼへの理解が広まってきたそう。2006年度からは、地元にある2つの小学校で生きもの調査を実施する予定です。

JA ささかみ DATA

産地特徴：独自の堆肥センターを運営、20年前から有機農業を行なう。首都圏の生協との産直活動を続け、消費者交流を年5回以上行なう。

主な出荷品目：こしひかり、もち、豆腐、酒

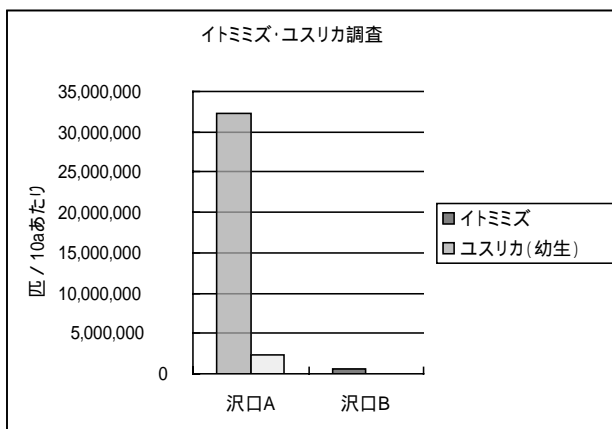


結果発表！

水田名		沢口A	沢口B
農法	水管理	ふゆみず	冬期落水
	耕し方	不耕起	耕起
	農薬・化学肥料	不使用	減・減
土のなかの生きもの調査 (10aあたり匹)	イトミミズ	3225万	58万
	ユスリカ(幼生)	233万	8万
生息環境調査	天気	小雨	小雨
	気温()	15	15
	水温()	17.9	17.8
	水深(cm)	6.0	4
	pH	6.34	7.52
	EC(mS/cm)	0.054	0.038
	DO(ml/l)	7.48	10.9
	ORP(mV)	-187	-164



泥を採取。土のなかの生きものを調べる。



山からの水が冷たい

見つかった生きものたち

イトミミズ、ユスリカ、ドブシジミ、トビムシ、ミジンコ、ケシ
タカピロアメンボ、ボウフラ、センチュウ

データを読む！ 粟生田忠雄 先生

減農薬・減化学肥料の圃場では、除草剤を散布した3日後だったため、

生きもの数に歴然と差が現れました。土の中の生きものは、時期によって相当に変化するということです。たとえば沢口の圃場は、4月上旬はヤマアカガエルのおたまじゃくしがとても多く、イトミミズを餌にしているため、4月はイトミミズの数が少なくなります。その後、サギが飛んできておたまじゃくしを食べたため、5月にはイトミミズの数が増えました。このように、生物の多様性に目を向けることが目的で、必ずしも数量にこだわりすぎないほうがいい、と言えるでしょう。



粟生田忠雄(あおうだ ただお)

1987年新潟大学農学部修了。1995年新潟大学大学院自然科学研究科環境学科専攻課程修了。1995年農学博士取得。現在新潟大学農学部助手。専門分野は土壤物理。土壌中の水分や圧力変化を追跡しつつ、作物生育に適した土壌環境について研究。